

アムド・チベット語共和方言の音韻論

—— 農区方言と牧区方言の比較研究 ——

海老原 志穂

1 はじめに

本稿では、アムド・チベット語共和方言（以下、共和語とする）における農区方言と牧区方言という2つの言語変種の音韻体系を明らかにする。そして、同源語の例を比較することにより、両方言における音素の対応関係を示す。更に、チベット文語との比較から、牧区方言がより文語上の表記に対応した音韻対立を多く有している、すなわち、牧区方言がより古い言語体系を維持している可能性があることを主張する。

2 共和語の概説

2.1 本発表での共和語とは

チベット語は、系統的にはチベット・ビルマ語群に属し、西部古方言、西部改新的方言、南部方言及び中国国内の3大方言（ウー・ツァン、カム、アムド語）に分類される。共和語は、3大方言のうちの1つ、アムド語に属する。アムド語は主に、中国西北部のチベット族の話す言語である。西（1987, 188）は、アムド語の下位方言として、23の方言をあげている。共和語はそのうちの1つである。西の言う共和語は、中国の青海省海南チベット族自治州で話されている言語を指すが、本稿での共和語は、中国青海省海南チベット族自治州の共和県において使用されている言語に限定する。

2.2 歴史、地理的な背景及び使用人口

民国年間（1911-49）に、青海省の循化、同仁、化隆から共和県にチベット族が移動し、定住して農民（rong ba）となったとされる（共和県地方誌編纂委員会編 1991, 469 以下、『共和県誌』とする）。現地での認識によると、それまでの共和県は牧民（'brog pa）の土地であったという。

海南チベット族自治州は、中国青海省の東部に位置し、州の中には共和県を含む5つの県（その他の県には、貴徳、貴南、同徳、興海）がある。共和県の民族人口の内訳は、漢族5万人、チベット族4万人、回族4,000人、モンゴル族1,000人となっている（『共和県誌』1991, 477）。共和語の使用者は主にチベット族であるため、使用人口は約4万人程度であると思われるが、共和語を話さないチベット族なども存在する。

2.3 恰卜恰鎮について

本稿では、恰卜恰鎮（ちゃぶちゃちん）を中心とする共和語の農区方言と牧区方言を研究対象とする。恰卜恰鎮は地理的、政治的に共和県の中心に位置する。恰卜恰鎮の総人口は約2万人であり、そのうちの約3千人をチベット族が占めている（『共和県誌』1991, 477）。恰卜恰鎮は市街地であり、居住するチベット族の多くは農区方言話者であるが、外部から移ってきた牧区方言話者も居住している。今回、特に恰卜恰鎮の共和語を中心に記述する理由は、県内においても音韻の差があるため、共和県の中心地である恰卜恰鎮の言語を記述することが重要であると考えたためである。以下に共和県の地図を示す。

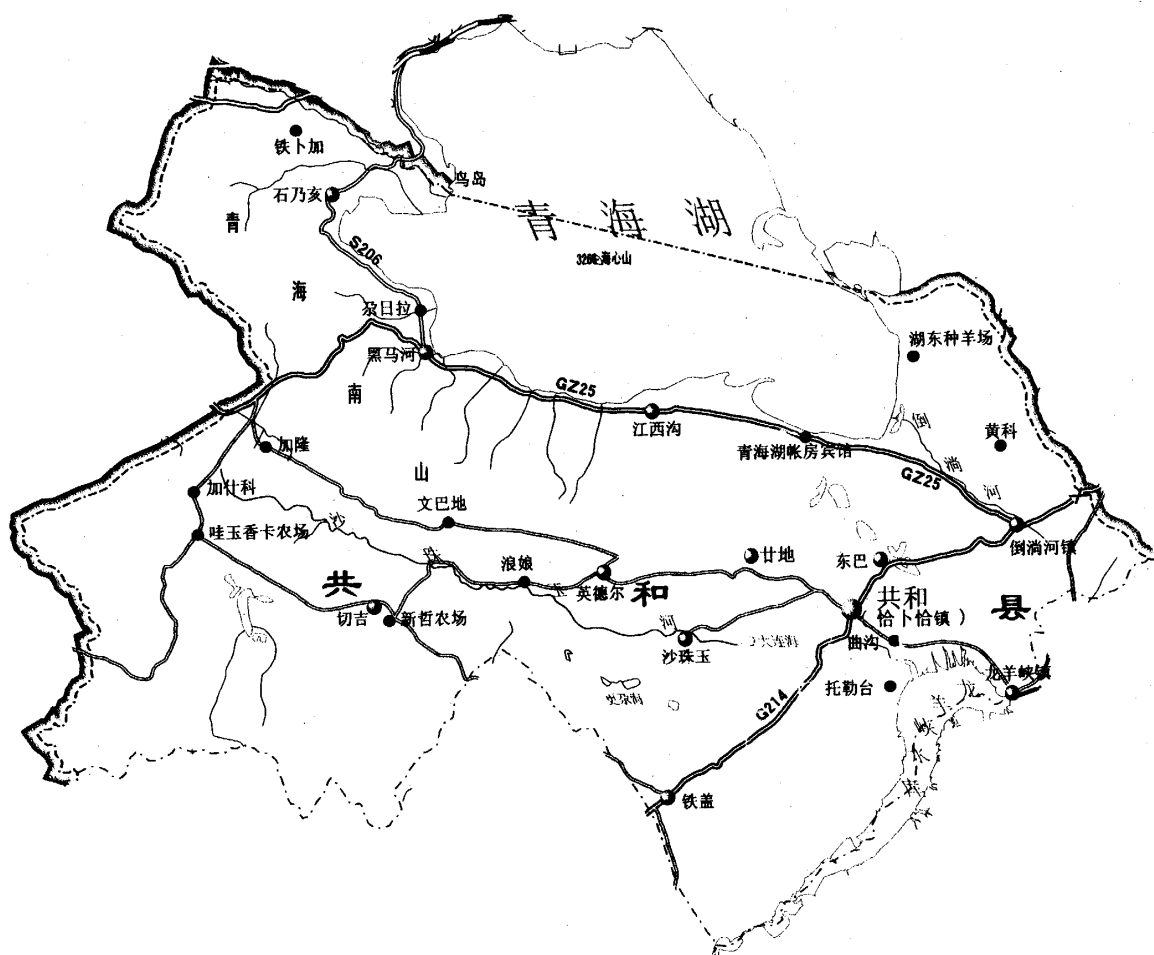


図 1: 共和県の地図（『海南・黄南藏族自治州経貿交通図』西安地図出版社（2002））

2.4 農区方言と牧区方言

アムド地域に居住するチベット人が農民あるいは牧民に2分されることは以前から指摘されており、その差異は、居住地などの地理的要因、生業や生活習慣などの社会的要因、言語

の違いなどに求められている (Rockhill 1895; Ekvall 1939 等)。アムド・チベット語は農民の話す農区方言 *rong skad* と牧民の話す牧区方言 *'brog skad* の2つに分類されることが多い (Hermanns 1952; 西 1987 等)。チベット人の間でも伝統的に、農区方言と牧区方言が区別されている。このような社会的言語変種は、地域による言語の差異よりも大きな違いとなっており、それがアムド語の特徴であると言える。農区方言と牧区方言の特徴については、Hermanns (1952, 193) に次のように述べられている。

農業地域はチベットと中国の国境に沿っていて、自然の障害も多く、多くの地域にわかれているので、農民の言葉は様々な方言にわかれる。

牧民の言葉は古態的言葉 (*archaisierte Sprache*) であり、非常に古い特徴をよく保持している」

「古態的言葉」というものがチベット文語に近いとすれば、「牧区方言が文語上の表記に対応した音韻上の対立をより多く有している、つまり、古い言語体系を維持している」とする筆者の見解は Hermanns (1952) に近いものである。

2.5 先行研究

『共和県誌』(1991, 806-807) には共和語の音韻的な特徴が6つ挙げられているが、これらはアムド語一般の特徴であり、特に共和語についての特徴が記述されているわけではない。6つの特徴を以下に引用する。

- I 比較的、子音の数が多。初頭子音の他に、子音連続をも有する。
- II 破裂音、破擦音、摩擦音、側面音、無声有気摩擦音以外に、前置子音とともに構成される子音連続があり、その後項に有声摩擦音、有声破裂音が現れる。
- III 前置子音を伴って構成される子音連続の無声化鼻音をもつ。
- IV 2重母音がない。
- V 鼻母音がない。
- VI 声調はないが、一部分に軽声の現象がみられる。

先行研究であげられている特徴は全て本調査においても観察された。ただし、以下のような音韻解釈の違いがある。1つ目の違いは、IIの「前置子音を伴った有声摩擦音、有声破裂音」を本稿では、子音連続ではなく、初頭子音と解釈することである。2つ目の違いは、IIIの「前置子音を伴って構成される子音連続の無声化鼻音」を本稿では、前置子音を伴っているとは解釈せず、無声鼻音の初頭子音としたことである。音声的事実と記述の簡便さから、本稿ではこのような解釈をとる。

2.6 調査期間と調査協力者

2003年8月の下旬から9月中旬まで、及び2004年3月、青海省恰卜恰鎮青海師範民族学院において調査を行った。調査では、典型的に農民、牧民であると考えられる調査協力者を対象とし、各々の言語を記述した。

調査協力者は、牧区方言を母語とする学生4人、農区方言を母語とする学生4人である。全員、年齢は20代前半であり、中国語（普通話、青海話）を自由に使うことができる。農区方言話者は全て恰卜恰鎮で育っている。恰卜恰鎮は都市部であるため、恰卜恰鎮出身の牧区方言話者というのは存在しない。牧区方言話者はそれぞれ倒淌河、廿地、江西溝、湖東種羊場の出身者であり、中学入学の際に都市部に來た学生である。上記の場所はいずれも、共和県の中では恰卜恰鎮に比較的近い地域である。

日本において追加調査を行った。協力者は2名の農区方言話者、拉毛氏（lHa mo、女性、共和県廿地出身、2001年来日、1971年生）と俄日措氏（Nor bu mtsho、女性、共和県廿地出身、2002年来日、1975年生）である。

各方言話者の間でも多少の音韻の差がみられたが、農区方言と牧区方言の差異に比べれば小さいものである。その差異については後述する。

3 農区方言と牧区方言の比較

農区方言と牧区方言を共時的に調査した結果をふまえた上で、同源語の例から両方言の音韻比較を行う。比較については、主に、西田(1970)で用いられている文語の語彙を利用した。紙面の関係上、チベット文語との対応関係はその一部のみを示す。

以下、3.1 声調、3.2 音節構造、3.3 初頭子音 C2、3.4 子音連続 C1C2、C2C3、C1C2C3、3.5 母音 V、3.6 末子音 C4 及び VC4、の順番で考察をすすめる。

3.1 声調

両方言において声調による語義の識別は行われていない。

3.2 音節構造

両方言ともに、以下のような音節構造をとる。C (Consonant) は子音、V (Vowel) は母音を表す。() 内は音節形成にとっての非必須要素である。

(1) 音節構造 (C1)(C2)(C3)V(C4)

最も短い音節としては V が可能である。子音連続及び V と C4 の組み合わせには制限がある。C1 は子音連続において現れる要素である。C2 は単独で母音を伴って音節を作ることのできる音素である。C2 が単独で音素となる場合これを初頭子音と呼ぶ。C3 も子音

連続において現れる要素である。C4 は母音の後に続くいわゆる末子音である。1 語は、1 音節または 2 音節のことが多い。

3.3 初頭子音 C2

農区方言における C2 には 37 (38) 音素を認める。() 内は一部の話者のみにみられる音素である。

表 1: 農区方言の C2

		両唇	唇歯	歯茎	そり舌	歯茎硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声無気	p		t	t̚			k		
	無声有気	p ^h		t ^h	t̚ ^h			k ^h		
	有聲	b		d	d̚			g		
破擦音	無声無気			ts		tɕ				
	無声有気			ts ^h		tɕ ^h				
	有聲			dz		dʒ				
摩擦音	無声無気		f	s	ʂ	ɕ		x		h
	無声有気			s ^h		(ɕ ^h)				
	有聲			z		ʒ			ʁ	
鼻音		m		n		ɲ		ŋ		
流音	有聲			l r						
	無声			l̥						
接近音		w					j			

牧区方言における C2 には 45 音素を認める。囲みは農区方言にはみられない音素である。

表 2: 牧区方言の C2

		両唇	唇歯	歯茎	そり舌	歯茎硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声無気	p		t	t̚			k		
	無声有気	p ^h		t ^h	t̚ ^h			k ^h		
	有聲	b		d	d̚			g		
破擦音	無声無気			ts		tɕ	c			
	無声有気			ts ^h		tɕ ^h	c^h			
	有聲			dz		dʒ	ɟ			
摩擦音	無声無気		f	s	ʂ	ɕ	ç	x		h
	無声有気			s ^h						
	有聲			z		ʒ			ʁ	
鼻音	有聲	m		n		ɲ		ŋ		
	無声	m̥		n̥		ɲ̥		ŋ̥		
流音	有聲			l r						
	無声			l̥						
接近音		w					j			

以下に、農区方言と牧区方言の C2 の対応関係を示す。囲みは対応関係のずれる箇所である（以下同様）。初頭子音の数の多い牧区方言を基準にして示す。牧区方言の /m̥, n̥, ɲ̥, ŋ̥/ に対して、農区方言では、C2 ではなく子音連続の /fm̥, fn̥, fɲ̥, fŋ̥/ が対応している。

表 3: 農区方言と牧区方言の C2 の対応関係

農区方言	p	p ^h	t	t ^h	ʈ	ʈ ^h	k	k ^h	b	d	ɖ	g	ts	ts ^h	dz	tɕ	tɕ ^h	
牧区方言	p	p ^h	t	t ^h	ʈ	ʈ ^h	k	k ^h	b	d	ɖ	g	ts	ts ^h	dz	tɕ	tɕ ^h	
dz	tɕ	tɕ ^h	dz	f	s	s ^h	z	ʂ	ɕ	ɕ	ʒ	x	ɣ	h	m	fɪm	n	fɪn
dz	c	c ^h	ʃ	f	s	s ^h	z	ʂ	ɕ	ɕ	ʒ	x	ɣ	h	m	m̥	n	n̥
ɲ	fɪɲ	ɲ	fɪɲ	l	l̥	r	w	j										
ɲ	ɲ̥	ɲ̥	ɲ̥	l	l̥	r	w	j										

農区方言と牧区方言の音素の対応が一致していない部分について説明する。各音素の対応例を同源語（同源形態素）の例によって示す。農区方言の例には「農」、牧区方言の例には「牧」という略号を付す。() 内に示したのはチベット文語のワイリー表記である。項目の後に、両方言と文語との対応に関する考察を示す。

1 /tɕ/—/c/, /tɕ^h/—/c^h/, /dz/—/ʃ/

農区方言には、牧区方言にみられる歯茎硬口蓋音と硬口蓋音の対立がなく、歯茎硬口蓋音に合流している。すなわち、無声無気音 /tɕ/ と /c/、無声有気音 /tɕ^h/ と /c^h/、有声音 /dz/ と /ʃ/ 各々のペアが、無気音は /tɕ/、有気音は /tɕ^h/、有声音は /dz/ に合流している。子音連続においても同様の違いがある（後述）。

(2) 農 /tɕ/—牧 /c/

「刀」(gri) 農 /tɕu/—牧 /cu/

(3) 農 /tɕ/—牧 /tɕ/

「茶」(ja) 農 /tɕa/—牧 /tɕa/

(4) 農 /tɕ^h/—牧 /c^h/

「血」(khrag) 農 /tɕ^hek/—牧 /c^hak/

(5) 農 /tɕ^h/—牧 /tɕ^h/

「酒」(chang) 農 /tɕ^haŋ/—牧 /tɕ^haŋ/

(6) 農 /dz/—牧 /ʃ/

「翼」(sgro) 農 /dzo/—牧 /ʃo/

(7) 農 /dz/—牧 /dz/

「換える」(rje) 農 /dze/—牧 /dze/

文語との対応関係を考えると、農区方言では、チベット文語の k, kh, g に下接字 y, r のついた有足字の系列と c, ch, j の系列などが音韻上区別されず、歯茎硬口蓋音に合流している。牧区方言では歯茎硬口蓋音と硬口蓋音として対立がある。

II /ɕ/—/ç/

摩擦音においては、農区方言には、牧区方言にみられる歯茎硬口蓋音と硬口蓋音すなわち、/ɕ/と/ç/の対立がなく、歯茎硬口蓋音/ç/に合流している。牧区方言にはこの対立がある。ただし、牧区方言の/ç/に対して有気音/ɕʰ/をもつ農区方言話者もいる。

(8) 農/ɕ/—牧/ç/

「肉」(sha) 農/ɕa/ (/ɕʰa/) —牧/ça/

(9) 農/ɕ/—牧/ç/

「帽子」(zhwa) 農/ɕatʰo/—牧/çatʰo/

つまり、農区方言では、チベット文語の zha と sha が音韻的に区別されず、歯茎硬口蓋音/ɕ/に合流することが多いが、一部の話者によっては/ɕa/と/ɕʰa/で区別される。牧区方言は歯茎硬口蓋音/ɕ/と硬口蓋音/ç/の対立をもつ。

III /ṁ/—/ṃ/, /ṇ/—/ṅ/, /ɲ/—/ŋ/, /ŋ̃/—/ŋ̃̃/

農区方言には、牧区方言にみられる無声鼻音の系列/ṁ, ṇ, ɲ, ŋ̃/と子音連続/ṃ, ṅ, ŋ̃, ŋ̃̃/の対立がない。ともに子音連続の/ṃ, ṅ, ŋ̃, ŋ̃̃/に合流している。無声鼻音の系列/ṁ, ṇ, ɲ, ŋ̃/を子音連続とは解釈せず、初頭子音としたのは『共和県誌』(1991)との相違点である。これらの音声は、その音声的事実に即せば、初頭子音であると解釈するのが妥当である。他のアムド語諸方言に関する記述においても、これらを初頭子音としている(江獲 2002; 格桑居冕・格桑央京 2002; 鈴木 2004 等)。

(10) 農/ṃ/—牧/ṁ/

「葉」(sman) 農/ṃmen/—牧/ṁman/

(11) 農/ṃ/—牧/ṃ/

「黄河」(rma chu) 農/ṃmatɕu/—牧/ṃmatɕʰu/

(12) 農/ṅ/—牧/ṇ/

「鼻」(sna) 農/ṅnaŋ/—牧/ṇa/

(13) 農/ṅ/—牧/ṅ/

「耳」(rna) 農/ṅnandzok/—牧/ṅna/

農区方言においては、形態素のレベルでは「鼻」(sna)も「耳」(rna)も/ṅna/である。この場合、「鼻」は/ṅnaŋ/、「耳」は/ṅnandzok/というように/ṅna/に他の要素を付加することで両単語が弁別されている。

(14) 農/ŋ̃/—牧/ɲ/

「心臓」(snying) 農/ŋ̃naŋ/—牧/ɲnaŋ/

(15) 農/ŋ̃/—牧/ŋ̃/

「古い」(rnying wa) 農/ŋ̃naŋ wa/—牧/ŋ̃naŋ wa/

(16) 農/ŋ̃̃/—牧/ɲ̃/

「早い」(snga) 農/ŋ̃̃na/—牧/ɲ̃a/

(17) 農/ŋ̃̃/—牧/ŋ̃̃/

「太鼓」(rnga) 農/ŋ̃̃na/—牧/ŋ̃̃na/

チベット文語における sm, sn, sny, sng と rm, rn, rny, rng は、農区方言においては音韻的に対立がない。どちらにも/ṃ, ṅ, ŋ̃, ŋ̃̃/が対応する。牧区方言では無声鼻音の系列/ṁ, ṇ, ɲ, ŋ̃/と/ṃ, ṅ, ŋ̃, ŋ̃̃/で対立している。

3.4 子音連続 C1C2、C2C3、C1C2C3

子音連続のタイプには C1C2、C2C3、C1C2C3 の 3 種類がある。C1C2C3 は、一部の牧区方言のみにしか認められない。C1 には /f/ と /n/ の 2 種類がある。C3 には /w/ と /r/ の 2 種類があるが、/r/ が認められるのは農区方言のみである。

fC2 における /f/ は、C2 が無声であるか有聲であるかによって音声的実現が異なる。C2 が無声音の時には 無声音 [x, χ, h] で実現し、C2 が有声音の時には有声音 [f] で実現する。

(18) /f/ の異音 — [x, χ, h] と [f]

「難しい」(dka') /fka/ [xka] 「喜ぶ・好きだ」(dga') /figa/ [figa]

農区方言の子音連続を、C1C2 と C2C3 にわけて示す。

C1C2 には次のような子音連続がある。fC2 と nC2 にわけて示す。

(19) fC2 /f/ が [x, χ, h] などの場合: /fɪp, fɪt, fɪts, fɪt, fɪtɕ, fɪk/
 /f/ が [f] の場合: /fɪm, fɪn, fɪl, fɪp, fɪj, fɪŋ/

(20) nC2 /nb, nd, ndz, nd, ndz, ng/

C2C3 には次のような子音連続がある。

(21) C2C3 /kw, k^hw, k^hr/

/k^hr/ [k^hr̥] は農区方言だけに観察された。この音素の語例としては、/k^hri/ 「(矢が的に) 当たる」と /k^hru/ 「損」のみしか確認していない。これらの例は牧区方言では /k^hr/ が /k^h/ に対応する。/k^hr/ は、狭母音の前のみに現れることから、後続する母音の影響によって現れたものと考えられる。農区方言において /k^hi/ (khos) 「彼が (彼-能格助詞)」と /k^hri/ (khed) 「(矢が的に) 当たる」という最小対があることから、/k^hr/ を /k^h/ とは別の音素として認める。

/k^hr/ は、管見の限りでは、他のアムド・チベット語に関しても報告がされていない。この子音連続は、母音の影響で生まれた新しい音素であると考えられる。

牧区方言には次のような子音連続がある。C1C2 と C2C3 にわけて示す。1 人の話者のみにみられた C1C2C3 については詳しくは触れない。/nk^hw/ という連続がある。

C1C2 には次のような子音連続がある。fC2 と nC2 にわけて示す。() 内は一部の話者のみにみられた音素である。

(22) fC2 /f/ が [x, χ, h] などの場合: /fɪp, fɪt, fɪts, fɪt, fɪtɕ, fɪk/
 /f/ が [f] の場合: /fɪm, fɪn, fɪl, fɪp, fɪj, fɪŋ/

(23) nC2 / (np^h), nb, (nt^h), nd, (nts^h), ndz, (nt^h), nd, (ntɕ^h), ndz, (nc^h)
 nj, (nk^h), ng /

C1/n/ に有気音が後続する系列の子音連続 /np^h, nt^h, nts^h, nt^h, ntɕ^h, nc^h, nk^h/ をもつことが確認されたのは倒淌河出身の 1 人だけである。/ntɕ^hwk/ [ntɕ^hwk] ('phyugs) 「間違

える」, /np^hur/ [np^hur] ('phur) 「飛ぶ」などがその例である。

C2C3 には次のような子音連続がある。

(24) C2C3 /kw, k^hw/

主に、子音連続音素の多い牧区方言を基準として子音連続の対応関係を示す。

表 4: fC2

農区方言	fɪp	fɪt	fɪts	fɪt̪	fɪtɕ	fɪtɕ	fɪk	fɪm	fɪn	fɪl	fɪp	fɪj	fɪŋ
牧区方言	fɪp	fɪt	fɪts	fɪt̪	fɪtɕ	fɪc	fɪk	fɪm	fɪn	fɪl	fɪp	fɪj	fɪŋ

表 5: nC2

農区方言	p ^h	nb	t ^h	nd	ts ^h	ndz	t ^h	nd	tɕ ^h
農区方言	(np ^h)	nb	(nt ^h)	nd	(nts ^h)	ndz	(nt ^h)	nd	(ntɕ ^h)
ndz	tɕ ^h	ndz	k ^h	ng					
ndz	(nk ^h j)	nɟ	nk ^h	ng					

表 6: C2C3

農区方言	kw	k ^h w	k ^h r
牧区方言	kw	k ^h w	k ^h

農区方言と牧区方言の音素の対応関係において、音素が一致していない部分について説明する。各音素の対応例を同源語（同源形態素）の例によって示す。

1 /fɪtɕ/—/fɪc/、/ndz/—/nɟ/

農区方言には、牧区方言にみられる/fɪtɕ/と/fɪc/、/ndz/と/nɟ/の対立がみられず、それぞれ、/fɪtɕ/、/ndz/に合流している。これは初頭子音 C2 でも示した、齒茎硬口蓋音と硬口蓋音の対立の有無と同様である。

(25) 農/fɪtɕ/—牧/fɪc/
「髪」(skra) 農/fɪtɕa/—牧/fɪca/

(26) 農/fɪtɕ/—牧/fɪtɕ/
「鉄」(lcags) 農/fɪtɕek/—牧/fɪtɕak/

(27) 農/ndz/—牧/nɟ/
「類」('gram pa) 農/ndzanba/—牧/nɟambu/

(28) 農/ndz/—牧/ndz/
「虹」('ja) 農/ndza/—牧/ndza/

チベット文語における lc と skr など、農区方言においては音韻的に対立がない。どちらとも/fɪtɕa/に合流している。さらに、'ja' と'gr の音韻的対立もみられず、ともに/ndza/に合流している。牧区方言では/fɪtɕa/と/fɪca/、/ndza/と/nɟa/で対立している。

II /k^hr/—/k^h/

牧区方言にはみられない音素/k^hr/が農区方言には存在する。この音素は牧区方言では/k^h/に対応している。

(29) 農/k^hr/—牧/k^h/

「(矢が的に) 当たる」(khed) 農/k^hri/—牧/k^hi/

(30) 農/k^h/—牧/k^h/

「彼が(彼-能格助詞)」(khos) 農/k^hi/—牧/k^hi/

農区方言に存在する/k^hr/と/k^h/の対立は、チベット文語においてはみられない。ともに、kh に対応する。この音素は比較的新しい音素であると考えられる。

3.5 母音 V

両方言ともに、音韻的には長母音及び2重母音が存在せず、農区方言、牧区方言ともに、/i/[i], /e/[e], /a/[a], /o/[u], /ɯ/[ɯ], /u/[ɯβ] の6音素がある。

農区方言と牧区方言の母音の対応関係を農区方言を基準にして示す。農区方言における母音が、牧区方言においては、母音+末子音に相当するものもある。

表 7: 農区方言と牧区方言の母音の対応関係

農区方言	i	e	a	o	ɯ	u
牧区方言	i	e, ep, ap	a	o	ɯ, ɯp	u

農区方言と牧区方言の母音音素は、牧区方言の Vp と農区方言の母音が対応する場合を除き、大体一致している。末子音/p/については、次の末子音 C4 及び VC4 において説明をする。

3.6 末子音 C4 及び VC4

末子音 C4 及び、母音と末子音 VC4 を説明する。

農区方言の末子音には/p, n, r, k, ŋ, C/の6つがある。閉鎖音/k/は内破音である。/C/は発話の際、語末では現れない。しかし、助動詞の/ta/, /tɕi/, /kɯ/, /s^hoŋ/, /taŋ/, 名詞化接辞の/po/, 接続助詞の/kɯ/などが接続する場合、後続する音素に逆行同化した形で実現する。/p/は母音/o/のみに後続する末子音である。/op/ [oβ] という音声で実現する。他の母音には後続しない。通時的な観点から考察すれば、末子音/p/は母音/o/の後ろのみで残存し、その他の母音の後ろでは消滅したものと考えられる。農区方言では末子音/n/は、母音を鼻音化することで実現する場合もある。牧区方言では閉鎖音で実現する。

農区方言の VC4 においては、母音/e/と/a/は弁別的でない。そして、後続する C4 に応じて V の音声的な実現は異なる。よって、/e/と/a/のどちらを音韻表記として用いるかは、実際の音声に近い方を採用する。Vŋ においては、母音/o/と/ɯ/も弁別的ではない。その

音声的な実現から/o/を音韻表記として用いる。

母音と末子音の組み合わせを表に示す。－はその組み合わせが存在しないことを表す。

表 8: 農区方言の VC4

	/p/	/n/	/r/	/k/	/ŋ/	/C/
/e/	－	/en/	/er/	/ek/	/aŋ/	/eC/
/a/	－					
/o/	/op/	/on/	/or/	/ok/	/oŋ/	/oC/
/u/	－	/un/	/ur/	/uk/		/uC/

牧区方言の末子音には/p, m, n, r, l, k, ŋ/の7つがある。閉鎖音は内破音である。母音と末子音の組み合わせを表に示す。

表 9: 牧区方言の VC4

	/p/	/m/	/n/	/r/	/l/	/k/	/ŋ/
/e/	/ep/	/em/	/en/	/er/	/el/	/ek/	/eŋ/
/a/	/ap/	/am/	/an/	/ar/	/al/		
/o/	/op/	/om/	/on/	/or/	/ol/	/ok/	/oŋ/
/u/	/up/	/um/	/un/	/ur/	/ul/		

農区方言と牧区方言の C4 及び VC4 の対応関係を示す。母音 + 末子音の数の多い牧区方言を基準に対応関係を示す。

表 10: 農区方言と牧区方言の VC4 の対応関係

農区方言		e	e	op	u	en	en	on	un	en	en
牧区方言		ep	ap	op	up	em	am	om	um	en	an
on	un	eC	eC	oC	uC	ek	ok	uk	aŋ	oŋ	er
on	un	el	al	ol	ul	ek	ok	uk	aŋ	oŋ	er
		er	or	ur							
		ar	or	ur							

農区方言と牧区方言の音素の対応関係において、音素が一致していない部分について説明をする。各音素の対応例を同源語（同源形態素）の例によって示す。

I 末子音/p/

農区方言では、末子音/p/が/o/に後続する場合のみ残存し、その他の母音の後ろにはみられない。よって、牧区方言での/ep/, /ap/は、農区方言では/e/に、/ɯp/は/ɯ/に対応する。/p/の音価は、牧区方言では閉鎖音 [b] で実現するが、農区方言では [b] の緩んだ摩擦音 [β] で実現する。農区方言の末子音/p/は、後ろに接辞が続く場合に後部要素に逆行同化した形で現れる。この点は末子音/C/と同様である。

(31) 農/e/—牧/ep/

「蔣く」(debs) 農/nde/—牧/ndep/

(32) 農/e/—牧/ap/

「針」(khab) 農/k^he/—牧/k^hap/

(33) 農/op/—牧/op/

「鞍」(yob) 農/op/ [oβ]—牧/op/ [ob]

(34) 農/ɯ/—牧/ɯp/

「西」(nub) 農/nɯ/—牧/nɯp/

チベット文語にある末子音/p/が農区方言においては/o/に後続する場合のみに残存している。他の母音の後ろでは消滅している。/ap/, /ep/には/e/、/ip/, /up/には/ɯ/が対応している。/op/の音声は農区方言では[oβ]で実現し、牧区方言では[ob]で実現する。

II 末子音/m/—/n/

農区方言には、牧区方言に存在する末子音/m/と/n/の対立がない。ともに末子音/n/に合流している。農区方言では末子音/n/は、母音を鼻音化することで実現することもある。牧区方言では鼻音化せずに閉鎖音で実現する。

(35) 農/en/—牧/em/

「心」(sems) 農/s^hen/—牧/s^hem/

(36) 農/en/—牧/en/

「世間」(jig rten) 農/ndzifiten/—牧/ndzifiten/

(37) 農/en/—牧/am/

「道」(lam) 農/len/—牧/lam/

(38) 農/en/—牧/an/

「白檀」(tsan dan) 農/tsenden/—牧/tsendan/

(39) 農/on/—牧/om/

「暇である」(khom) 農/k^hon/—牧/k^hom/

(40) 農/on/—牧/on/

「左」(g-yon) 農/fjon/—牧/fjon/

(41) 農/ɯn/—牧/ɯm/

「おいしい」(zhim) 農/ɕɯn/—牧/ɕɯm/

(42) 農/ɯn/—牧/ɯn/

「兄弟」(spun) 農/fpɯn/—牧/fpɯm/

農区方言には、チベット文語に存在する am と an、im と in、um と un、em と en、om と on の音韻的な対立がない。am と an、em と en には/en/、im と in、um と un には/ɯn/、om と on には/on/が対応している。

III VC4/en/—/an/、/er/—/ar/、/el/—/al/、/ek/—/ak/

農区方言には、牧区方言には存在する/en/と/an/、/er/と/ar/、/el/と/al/、/ek/と/ak/の対立がない。

(43) 農/en/—牧/an/

「あれ」(gan) 農/ken/—牧/kan/ [kɛn]

(44) 農/en/—牧/en/

「引く」('then) 農/t^hen/—牧/t^hen/ [t^hen]

(45) 農/er/—牧/ar/

「バター」(mar) 農/mer/—牧/mar/ [mɛr]

(46) 農/er/—牧/er/

「個人の」(sger) 農/ger/—牧/ger/ [gɛr]

(47) 農/eC/—牧/al/

「疲れる」(chad) 農/tɕ^heC/—牧/tɕ^hal/ [tɕ^hɛl]

(48) 農/eC/—牧/el/

「ない」(med) 農/meC/—牧/mel/ [mɛl]

(49) 農/ek/—牧/ak/

「兵」(dmag) 農/fimek/—牧/fimak/ [fɪmɛk]

(50) 農/ek/—牧/ek/

「火傷する」(hreg) 農/ɕek/—牧/ɕek/ [ɕɛk]

農区方言には、チベット文語に存在する an と en と、ar と er、al と el (または ad と ed)、ag と eg の対立がない。つまり、末子音 n, d, r, l, g に前接する母音 a, e の対立がない。牧区方言にはこの対立がある。

IV 末子音/C/と/l/

農区方言の末子音/C/は発話の際、語末では現れない。接辞が続く場合のみに後部要素に逆行同化した形で現れる。農区方言の末子音/C/は牧区方言における末子音/l/に対応する。/l/も後ろに接辞がつづく場合に後部要素に逆行同化する音素である。

農/C/—牧/l/

(51) 単独の場合

「ある」(yod)

農/joC/ [jo]—牧/jol/ [jol]

(52) 接辞が後接する場合

「あるだろう」(yod rgyus red)

農/joC tɕi=re/ [jottɕire]—牧/jol tɕi=re/ [jottɕire]

チベット文語における末子音 d, l は、牧区方言においては/l/で実現する。農区方言においては子音要素/C/で実現する。/C/は発話される際、語末では現れない。

4 音素対応のまとめと考察

4.1 音素対応のまとめ

以上、農区方言と牧区方言の音韻体系を明らかにした上で、音素の対応関係を示した。この対応関係をまとめる。

初頭子音 C2 について

牧区方言は歯茎硬口蓋音と硬口蓋音 /tɕ/ と /c/、/tɕʰ/ と /cʰ/、/dz/ と /ʃ/、/ɕ/ と /ç/ の対立をもつ。農区方言ではこれらが歯茎硬口蓋音に合流している。無声鼻音の系列 /m̥, n̥, ɲ̥/ も農区方言にはみられない特徴である。

子音連続 C1C2、C2C3 について

牧区方言には歯茎硬口蓋音と硬口蓋音 /fitɕ/ と /fic/、/ndz/ と /nʃ/ の対立がある。農区方言ではこれらが歯茎硬口蓋音に合流している。ただし、農区方言のみにみられる子音連続音素として /kʰr/ がある。

末子音 C4 及び VC4 について

農区方言には、末子音 /p/ が母音 /o/ の後ろのみにしか存在しない。

牧区方言は末子音 /m/ と /n/ の対立、および、VC4 の /en/ と /an/、/er/ と /ar/、/el/ と /al/、/ek/ と /ak/ の対立をもつ。農区方言はこれらの対立をもたない。

牧区方言の末子音 /l/ は、農区方言では子音要素 /C/ に対応している。/C/ は発話の際には語末で現れない音素である。

4.2 考察

これらの結果から、牧区方言が農区方言に比べ、初頭子音、子音連続、末子音、VC4 の対立を多くもっていることがわかった。そしてこれらの対立は、チベット文語にみられる文字の組み合わせに対応している。農区方言のみにみられる音素 /kʰr/、/C/ はチベット文語に対応したものではない。

西田 (1987, 117) に述べられるように、チベット文語⁽¹⁾が、各時代各地域の口語の特徴を表記上に反映させた中古チベット語を基礎にして成立したものであるならば、牧区方言が当時のチベット語により近い音韻体系をもつと結論づけることができる。

アムド語において「牧区方言が農区方言に比べ、古い言語体系を維持している」という事実は、Hermanns (1952) をはじめとする先行研究において述べられてきた。そして、このことは、現地のチベット人の共通理解ともなっている。しかし、同じ地域で話される農区方言と牧区方言を比較し、この事実を具体的に明示した研究はこれまでのところ未見である。よって、本稿では、共和県における農区方言と牧区方言の音韻体系を共時的に明らかにした上で、その音素比較を行なった。そして、文語との対応関係から、牧区方言が農区方言に比べて、チベット文語の表記に対応した音韻的な対立を多く有する、つまり、「牧区方言が農区方言に比べ、古い言語体系を維持している」ことを示した。

文献表

Denwood, P.

1999 *Tibetan*. London: John Benjamins.

Ekvall, R. B.

1939 *Cultural Relations on the Kansu-Tibetan Border*. Chicago: University of Chicago Press.

Hermanns, M.

1952 "Tibetische Dialekte von Amdo." *Anthropos*. vol. 47. pp.193-202.

Rockhill, W. W.

1895 *Notes on the Ethnology of Tibet*. Washington: Government Printing Office.

共和県地方誌編纂委員会編

1991 『共和県誌』青海人民出版社。

格桑居冕・格桑央京

2002 『藏語方言概論』民族出版社。

江獲

2002 『藏語語音史研究』民族出版社。

鈴木博之

2004 『チベット語及び川西走廊諸語における子音に関する研究 ——音声的特質に依拠した子音連続の分析の試み——』京都大学修士論文。

西義郎

1987 「チベットの方言」『チベットの言語と文化』長野泰彦・立川武蔵編、冬樹社、pp.170-203。

西田龍雄

1970 『西番館譯語の研究 ——チベット言語学序説——』(華夷譯語研究叢書 I)、松香堂。

西田龍雄

1987 「チベット語の変遷と文字」『チベットの言語と文化』長野泰彦・立川武蔵編、冬樹社、pp.108-169。

——アムド・チベット語共和方言の音韻論——

注

- (1) 西田（1987, 117）は「チベット文語」について次のように述べている。「チベット文語は、七世紀以来漸次変遷した中古チベット語の書写法を基礎としたであろうけれども、古典チベット語のもつ諸規則に同化されたいわば混合的な性格をもつ書写語である。」